

近藤邦康著『中国近代思想史研究』(勁草書房, 1981)

杉 山 文 彦

本書『中国近代思想史研究』は、近藤邦康氏が、ここ二十余年間に発表された中国近代思想に関する研究論文をまとめたものと、書評数篇とから成っている。論文の部分は、三章から成っており、第一章においては譚嗣同が、第二章においては章炳麟が、そして第三章では李大釗が、それぞれ中心におかれて論じられている。

このことから明らかなように、本書は、中国近代史における三つの運動、すなわち戊戌変法(1898)、辛亥革命(1911)、五四運動(1919)のそれぞれにおいて、思想的支柱であった者として、上記三名の思想家をとりあげ、中国近代とは何かを考えることを目指している。直接対象とされているのは、中国近代の前半であるが、近藤氏の研究が、中国マルクス主義、毛沢東思想の解明をもその視野に入れたものであることは、論述の中から自ずと感じ取れる。

近藤氏は中国近代史を、中国が近代資本主義世界の中にひきずりこまれ、それと悪戦苦闘し、ついにそれを打ち破った歴史と考える。そして、思想家をこの状況の中であって状況と格闘する存在としてとらえ、その中で思想家が、自己をとりまく状況をどのように理解し、どのように対応したか、また、その状況との格闘を通して、どのように自己を変革していったかを、考察の対象としている。その場合、「天下の民」から「人民」への民衆概念の転回、士大夫から民衆の一員としての知識人への思想家の立場の変革が、中国近代思想史上の大きな流れとして想定されるとともに、考察の対象にもなっている。

第一章 「清末変法論と譚嗣同」。この章では、「変法派の中でもっとも急進的であり、もっとも

深く思索した譚嗣同」が中心であるが、「彼が置かれた問題状況を知るために」張之洞の中体西用論と、康有為の大同思想が、先にとりあげられている。

洋務派の大官張之洞については、「中学」すなわち「聖人の道」=三綱五倫を「体」とし、西洋の新技术を「用」とする彼の「中体西用論」は、三綱五倫をドグマとして絶対化し、民衆を政治的・道徳的に全く無能な存在と考え、絶対化された三綱五倫によって上から民衆を秩序だてる点で、旧来の王朝の体制教学を一步も出るものではない、と結論づけられている。一方、康有為の場合は、公羊学にもとづく彼独特の一種の「発展段階説」によって、「聖人の道」は可變的なものとされ、したがって三綱五倫も相対的なものとされるが、民衆を政治的・道徳的に無能な存在と考える点においては、基本的に張之洞と同じとされている。彼の発展段階説の段階を先へと推し進める主体は民衆ではなく、聖人であり、現実の社会改革においては、「天子の権力を背景とする方向から発想せざるをえない世界観であった」とされている。

譚嗣同についての論では、彼の主著『仁学』の考察が中心をなしているが、その前提として、彼が明末清初の思想家王船山の説にもとづいて、中体西用論の体用の関係を逆転し、「道」を用、「器」を体とし、「器」が変化すれば「道」も不変ではありえないとし、したがって、「聖人の道」は三綱五倫のような固定したものではなく、変法して治を図ることこそが「聖人の道」を衛ることである、と主張した「道器」論がとりあげられ、さらに「心力」の説がとりあげられている。

『仁学』についての考察では、まず譚嗣同が「遍

法界、虚空界、衆生界に、至大で至精微な、あらゆる所にくっつき、貫通し、からみつき、充滿している一物」とした「以太」の検討が行われている。譚嗣同のこの「以太」は、万物を成り立たせる根元の物質であるとともに、宇宙の総体でもあり、しかもそれは常に一時もとどまることなく運動し変化していながら、総体としては不変である、という、ちょっと言葉では表現しにくいものなのであるが、この「以太」によって、宇宙は常に運動を続ける不定型の総体とされ、個々の物は総体と不可分のものとして常に運動しているものと考えられる。そして、そのこと自体は本来「楽」であるとされ、宇宙は本来肯定的存在であるとされる。では現実にある「苦」は何によって起こるのか。それは、本来総体と共に運動し変化してゆくはずの個々の物に、人間が「名」を付してそれに固執し、それを固定化しようとするため、「以太」の運動が阻害され、本来一体であるべきものに分裂が生ずることから起こるのである。これが『仁学』における譚嗣同の基本的考え方であるが、近藤氏はこれを、宋代の思想家張横渠の「気」の哲学に通ずる「伝統的な天本的立場」ととし、さらに、譚嗣同の政治的立場は、三綱五倫や王朝体制を、人と人とを分裂させる「名」であり、「以太」の運動を阻害する「網羅」として、それを「衝決」(つきやぶる)することによって本来の「以太」の運動を回復すれば、自ずとすべては良い方向に向くとするものである、としている。

さらに、譚嗣同のいう「学会」の性格が検討され、彼の立場が、郷村＝共同体的村落を守り、自ら資本主義化を進めようとする開明的郷紳層の立場であり、中央政府による洋務運動への批判からでてきた路線であるとされている。

そして最後に、譚嗣同の思想史的意義は、王朝体制の成立する論理的基盤を中国の伝統思想によって否定し、「真に科学的理論を創造する地盤」を準備したことにある、と結論づけられている。

第二章 章炳麟における革命思想の形成。章炳麟は単に革命派の代表的思想家というだけでなく、中国伝統學術の最後にそびえる巨峰でもあるが、近藤氏は戊戌変法から辛亥革命にいたる時期の章炳麟を「彼の革命思想の形成過程と構造とを、彼の革命家としての生き方『学問ある革命家』(魯迅)の立場との関連において」考察している。

論述は「変法運動の時期」「戊戌変法から『蘇報』事件まで」「『民報』の時期」の三つに分けてすすめられており、さらに「中間的総括」と補論が三つ加えられている。

まず、章炳麟が当初変法派と行動を共にしながら、その中ではかなり異質な存在であったこと。すなわち、共に西洋からの圧迫に対し危機感をいだきながらも、変法派の場合は、法律・制度の面では、西洋を学習すべき手本としていたのに対し、章炳麟にとっては、白人による黄人への圧迫、黄人の白人に対する抵抗こそが問題であったこと。戊戌変法の失敗、義和団事件などの歴史の動きから章炳麟は、清朝を打倒しなければ、白人への抵抗は不可能であることを知り、排満革命を目ざしはじめたこと。また、彼にとっては、人民とは聖人から配慮せられる受動的な存在ではなく、抵抗の主体として考えられていること、などが、新旧の『楹書』の文や、「駁康有為論革命書」などによって述べられている。

次に、章炳麟がその生涯のうちで、もっとも深く革命運動にかかわった時期、すなわち、東京で『民報』の編集に当たっていたころの彼の思想が論じられている。ここではまず、彼の革命道徳論がとりあげられている。章炳麟は過去の革命の失敗を革命の荷い手である者の道徳的腐敗のためであるとし、旧来の士大夫の富貴利禄を求める精神が運動を腐敗させるとして、仏教による革命道徳の確立を主張したこと、そして、その仏教とは「唯識」であり、彼が革命の主体とした人民の主体性も、この「唯識」の論理によっていることが述べられ

ている。

唯識論によれば、世界の現象はすべて意識の作用によって起こる幻ということになり、その幻を実在と固執すること、すなわち我執によって苦が生ずるのであるが、唯識ではこの我執を解いて真如にもどろうとする別の「我」が想定されている。この「我」(依他起自性)はその性質上、我であると同時に全体にも通じており、我執が解ければ自らも消える。章炳麟が考えた革命の主体とは、このような「我」の主体性を持ったものである。したがって、この革命主体は、圧迫に応じて「我」を立てて抵抗し、圧迫があるかぎり、次々に「我」を立てて抵抗し、圧迫の無くなったところで主体も消滅する。

以下、この理論によって、被圧迫民族にだけ抵抗のバネとして民族主義を認める章炳麟の民族主義論が成り立っていること。それは漢民族にとどまらず、全世界の被圧迫民族の解放につながるものとされ、ついには「帝国主義と封建主義という中国革命の二つの敵の初歩的な構造的把握にまで到達している」こと。また章炳麟は進化を「苦楽並進」としてとらえ、苦の側からそれを拒否していること、などが述べられており、この章炳麟の思想は、西洋の圧迫の強化と改革の失敗によって、中国が追いつめられてゆく中であって、「西洋の積極的発展的原理に対して、中国の消滅に向う消極的後退的原理」で抵抗したものであり、「中国伝統思想が、そのものとして、中国革命においてある積極的な役割を果たした最後の機会であった」と結論づけられている。

また、この論文の終りの部分では、代議制は豪右・富民を利するだけとして代議制を否定し、總統制を主張した章炳麟の政体論が検討され、補論Ⅱにおいては、「革命思想の三潮流」として章炳麟のほか、楊毓麟、孫文についても言及がある。

第三章 「民国」と李大釗の思想。ここでは中国共産党創立者の一人である李大釗の辛亥革命か

ら五四運動、中国共産党創立までの思想の歩みが民国の政治の動きとかさねあわされながら考察されている。

マルクス主義の受容という中国思想史上の重大事件を自ら体現しているこの思想家の思想形成を「出発——『言治』(1913)」「模索——(1)日本留学(1913～1916)(2)帰国後(1916～1918)」「展開」の三段階にわけて論じているが、「出発」「模索」でマルクス主義と出会う以前の李大釗が論じられている。

この時期の李大釗については、『言治』に彼が発表した諸文や「厭世心と自覚心」「民彝と政治」「青春」「今」などによって検討が加えられている。そこから受ける李大釗の印象としては、自分を知識人として第三者の立場において、諸政治勢力に改善の要求をつきつける傾向を持つ点で伝統的士大夫の感が強いこと、現状の暗黒に対し宇宙は本来肯定的なものであり、「心の改造」によって力を得て暗黒を打破し光明を出現させようとする指向が強い点で、譚嗣同と共通する面が強いこと、陳独秀と対比されることによって一層明らかとなっているが、彼は内から発する生命力に信頼をおく傾向の強い思想家であること、などである。

「展開——(1)ロシア革命、第一次大戦終結、(2)五四運動、中国共産党創立」ここでは李大釗がマルクス主義を受容してゆく過程と、その後の活動が論じられている。この内容紹介は、もはや筆者の手にあまるが、次の一点にだけふれておこう。すなわち、よく問題とされる李大釗のいう「物心両面の改造、霊肉一致の改造」とマルクス主義の関係についてである。この点に関し、近藤氏は、ここから李大釗のマルクス主義観の未熟を指摘することもできようが、この問題自体は「おそらく、マルクス主義の側でも担っていかなければならない重要なものであろう」とし、「フォイエールバッハ、初期マルクスの『宗教批判』に照応するのではないかと思う」と論じている。

以上、極めて不十分、特に第三章などは内容紹介の体を成していないが、一応これまでとする。この『中国近代思想史研究』を一読して感じたことは、中国近代思想史を「人民中国行き」の急行列車で、戊戌変法から五四運動まで走ったという気持であった。車窓にはいろいろな景色がちらつくが、列車は人民中国へ人民中国へと驀進して、ゆっくり見るひまもない。やはりもっと景色がほしいと思った。もとよりこれは学術書であるから、読み物としての面白さを求めることは、お門違いであるが、構造的絵画的にえがかれた社会の中に思想家をおいてみるのが、もう少しあっても良いのではなかろうか。特に人民中国を他と同じ一つの外国と見ることが定着しつつあるかに思われる今日にあっては、人民中国まで急いで歴史をたどることよりも、一時代は一時代として構造的に見た方が良いのではないか。

それからもう一つ。譚嗣同における全体と個の対立関係を、本末的対立関係と見るみかたや、章炳麟の唯識による主体の立て方などは、今日の中国その他の人間関係のあり方を考える上で大いに示唆に富むもので面白いが、これを思想史上に位置づける場合、このままで良いものであろうか。書かれたものは、著者の手をはなれて他人に読まれる。(この点で本書第二章補論Ⅲで問題となっている、島田虔次氏の近藤氏への批判は当たらない。思想と思想家個人とは必ずしも一致しないのであるから)。その読まれ方によっても思想史上における位置づけがある程度決ってくるのではあるまいか。同時代の人にとどのように受け取られていたかということに対する考察が、思想史研究(思想家研究ではなく)の場合必要なのではあるまいか。

以上、不強勉な一般読者からの感想である。

(女子美大付属高校教諭)

声 明 書

中華人民共和国成立以前、日本帝国主義が長年にわたり中国大陸をはじめアジア諸国を侵略したことは、世界周知の厳然たる事実である。にもかかわらず文部省は1983学年度より使用される高校の社会科教科書の検定にあたり、「侵略」を「進出」に、「出兵」を「派遣」に、「収奪」を「譲渡」に、「抵抗運動」を「暴動」に書き換えさせるなど、極めて反動的な改悪をおしつけている。

1972年の日中国交正常化以来、1978年にはすでに日中平和友好条約が締結され、今年はまさに国交正常化10周年に当る。この条約の精神は、日本が過去において犯した中国への侵略に対する深い反省の上に立って、日中両国民の子々孫々にわたる平和共存を誓い合ったものである。

科学的な中国研究の成果を国民の共有財産とし、若い世代の日中関係史認識の形成に寄与しようと念願しているわれわれは、歴史的事実を歪曲して日本帝国主義の対中国侵略戦争を美化しようとする文部当局の企図を断じて容認することはできない。

われわれは、文部省が日中平和友好条約の根本精神を堅持・遵守し、速かに検定姿勢を改めることを要求するものである。

1982年7月17日

社団法人 中国研究所第34回所員総会